

常一紋 トンネル

小池 喜幸

— 北辺に築かれたタコ労働者の碑 —

朝日新聞社刊 定価千円

タコ部屋の歴史と現実について、実によく調べてある。書いた人は北海道の高校の先生だそうで、地元はもとより、各地を歩き廻ってタコ部屋の生証人を捜し出し、聞き書きをしている。類の少ない貴重な本だろう。しかし、少しひっかかるのは、タコ部屋で働いた労働者の「今でもあったら、又行ってもいい」という言葉への掘りおしがりな点、タコ部屋の帳場やオヤジらの「おれたちも被害者だ」というのに同情的なことだ。

「土工・玉吉」という本がでたときにも言われたことだが、「明るすぎる」とか「楽しんでるみたいだ」とか「強い者の勝手をノウガキだ」といった批判があったが、考えようよれば、そうしたところしか行く所のない人間にとってみれば、逃げてばかりはいられないし、かといってすぐなおすこともできなければ、せめて、そこ（タコ部屋）を楽しむことを考えるだろう。だれだっていい

けているより、楽しくやりたいものだ。たとえば、トンコすることもその一つだ。いかにオヤジをくやしがらせるか、と考えてみれば生命がけではあるが「楽しさ」となるだろう。トンコに勝ったオモシロクテためになるがいくつか、この本にものっている。

もう一つの、帳場やオヤジも「犠牲者だ」というのは、いくら、もっと悪い奴がいる、国や政治の犠牲者だといわれて、はいそうですかというわけにはいかない。どんな理由があるにしても、弱い立場のタココを食って儲けたのは事実なのだから。

良心的にやっていたら、だれもタコ部屋とはいわないだろう。エグツナイことをやっておいて何をいうかといいたいぐらいだ。

ちよつと感覚的な批判だが、読んだ感想として。だけでも、いい本だと思う。

「私の大阪地図」 寺島珠雄

たいまつ社 一七〇頁 千円

この本を書いたのは「渡世」編集委員の一人で、今からざつと十五年前、大阪駅の手配師につれられて阪急池田の飯場へ入ったのを皮切りにした自分の飯場歩きの記録だ。一人の中年男が関東から流れてきて、はじめて土方をやり、トビ仕事もおぼえ、飯場歩きから釜ヶ崎のドヤにめぐらされるまでのことが出てくる。記録は十五年のすべてではなく、その前半で終わっているが、すべて具体的でおもしろい。

本の内容は次のようになっている。

- (1) 大阪駅・池田 (2) 道修町三越裏 (3) 食いしゃべるその他 (4) 町内 (5) ある路地的空間釜ヶ崎 (6) 天王寺公園から (7) 西中島南方 (8) また釜ヶ崎 (9) 八尾安中町地下鉄西梅田駅 (10) 釜外・姫路 (11) また釜ヶ崎 (12) 釜ヶ崎 (13) 釜ヶ崎 (14) 「ささやき」という詩 (15) 手配師メモ・あとがき

ほかに野尻賢司の挿し画が数点。

「渡世」を売っている新開筋の千石書店にある。また三角公園西の「渡世」のノレンを出している「おにぎり屋」で聞いてもらってもいい。

「馬の骨放浪記」 山田勝三

一光社 定価八五〇円

新今宮小・中学校の西にあるガードレールに、「馬の骨放浪記」山田勝三 1977・8・9 「日本国」山田勝三来る記念に書く「労働者の祭典メーデーパンザイ、バンザイ」などと書かれている。

八月九日前後に、「馬の骨放浪記」の黄色と白のノボリを立てた箱車を引いて、全国宣伝販売をしている山田勝三さんを見かけた人もいることだろう。ガードレールの落書は多分山田さん本人が書き残したものだと思う。山田さんの最初の記憶は、どこかわからない駅頭で、多くの浮浪児と一諸に空腹と寒さで目をさましたことである。その時、推定年令四才。以後、山田さんの記憶に残った、体験したことを綴ったのが「馬の骨放浪記」である。

「私の知る限りでは、出版物はすべてインテリのためのものであったと思います。私のような土方風情が書いたものなど見たことも、聞いたこともありません。大正、昭和を生きた庶民の、それも屑屋や土方をしながら生きてきた」山田さんが、夜間中学で文字を学び、五年かけて書き上げた本。一読を！

釜 ニュース・釜 ひょうろん

生きたマムシを売っていた

この夏、釜でめずらしかった一つは、露店で生きたマムシを売っていたことだ。真夏より早く、五月の末ごろからだったかもしれない。

店は銀座通りから一筋東へ寄った、いまの釜でいちばんにぎやかな通り（三角公園——市民館前——とり屋の前——医療センター前）に出ていて、マムシはちいさなガラスのケース、金魚鉢みたいなものの中でじいっと目を光らせていた。

おれがきいた時は一匹二千円だといったが、いつも同じネダンだったかどうか、それはわからない。

ヒゲの濃いニイチャンが自分でつかまえてきて売らしく、一度なんか、咬まれたオヤユビにホータイしていたこともある。大丈夫かい？　という、なあにもう馴れとるさかいと笑っていたが、実際、そのニイチャンは、いまも元気で店を出している（ただし、もうマムシは売っていない）から、何でもなかったわけだ。

ガラスケースの中のマムシは、一匹のときもあり、三匹か四匹　か、からまりあつてよくわからないときもあった。あの生きたヤツを買ったのは誰だろう。

銭湯と両方の責任だ。刃のところを包んだ紙がミドリ色のやつだ。

それにしても、釜の銭湯は早朝から深夜までやっているとても便利だけど、別の見方をすればそれはたくさんある。一つは、市の中の地域では開業する銭湯が多いということ、釜では新装、改装が相次いでいるのは、もうかつての証だ。カミソリとか、一回きりの小型セクションとか、貸タオルとか、ほかの地域では大して需要のないものも釜ではよく売れる。（百三十円のふろ代に、タオル、モッケン、カミソリを加えると百九十円になる）。

で、この際ひとこと言っときたいのは、たくさん銭湯がそれぞれにもうかっている釜では、市内のほかの地域と違って、お役所のきめるふろ代だから、客の少ない地域も朝から夜中まで客の絶えない釜も同じになっている不合理が通用していて、だから釜の銭湯はますますもうかることになる。

ヒトのもうけをネタムわけではないが、もっと現実に合わせてやり方はできないものかねえ。

った。あの生きたヤツを買ったのは誰だろう。一升ビンに入れてマムシ酒にして売ってるときは、焼酎に漬けたマムシはもちろん死んでいたが、その方は三千円のと五千円のとネダンは二通りだった。山へ行つてトリモチで小鳥をつかまえてきて売男のことは前から知っていたが（現場でいっしょになったことがある）、マムシ捕りは初めてだ。誰かあの生きたヤツを買って、カバヤキにして食べたのだろうか。

釜のふろ代は高すぎる

ずっと前に「ふろ」の特集をやったことがある。その後、ふろ代の値上りもあったし、また「ふろ」について報告したいと思っていたが、こんどは間に合わなかった。

そこでとりあえず、カミソリについてだけ書くと、いまカミソリはみんな二十円だけど、安全カミソリ型のと大きなやつ、エが長くていかにも使いよさそうに見えるのが、一番切れ味が悪い。

これは一度や二度の経験ではなく、何十回も同じように切れ味が悪いのだから、作っているところと売っている

芸人をカミサマにするな

「王寺村」記念碑というのできるらしい。

見たヒトも多いと思うがパチンコ大一のななめ向いの方にある高道道路入り口の左わき、王寺村記念碑をたてる予定地のシルンが前からある。

天王寺村というのは、以前、山王一丁目にたくさん芸人がすんでいて、そこが通称「てんのじ村」と呼ばれたからで、記念碑をたてる会の名前は次のようになっている。

大阪「天王寺村」芸能文化保存会

そして、もう四年も前に、王寺村芸能会式には中田ダイマル・ラケット、西川ヒノデ、笑福亭松鶴、橋中軒篤重なんて有名な芸人も出たが、この顔ぶれでもわかるように、つまりは漫才、落語、浪花節などの芸人がたくさん住んでいた土地はここだという記念碑だ。

ところで、碑をたてることには賛成も反対もしないけれど、その関連で会のキカン紙「てんのじ村」の5号に次の記事が出ていたので紹介したくなった。

心配な維持管理

天下に有名な西成あいりん地区（釜ヶ崎）の一角に山王

地区が入れられている。

ど承知のとおり、あいりん地区は労働者の町であり社会的には最底の生活環境にある人が多く、常識的な観念では割り切れないものがある。町に緑を、公園をと呼びかけて実現すれば浮浪者の溜り場となり、野宿の場や街頭トバに利用されてしまう。

立派な記念碑が建ち、植樹して美しい環境を作っても、心なき一部の労働者に利用される場所になってはいけない。

私は維持管理が大変むづかしいと思う。浮浪者が常に寝ころんでいては、浪華文化の遺跡として訪れる人も来なくなり、逆に、治安当局の取締り拠点が一層増えただけと言うことでは記念碑建設の意味がない。

関係者の方々もこの点は充分に承知と思うので、維持管理について強力な対策を考へて欲しいと思う。

(山王町の住民から)

これを書いた人は大分アタマがいらしくて、先を脱んで、いろいろ心配しているようだが、芸人のムラがあったという記念碑ができたとして、そのまわりをサントトカ神宮の境内のようにでもしたいのかしら。

いまじゃ芸能人なんて能という一字をくっつけてエラツウにせよけれど、芸人のそもそもをさかのぼって行け

は河原乞食という言葉も出てくるわけで、昔は社会の外に差別されていた。それが世の中変ってアコガレのめいたになったからといって、この記事のように、こんどは労働者をカタナイもの扱いしてはよくないよ。

ヒルネだろりとアオカンだろうと、その記念碑のそばでやったら夢に漫才がきこえますよとか、芝居が見られますよとか、そのくらいイキなジョーダンでも言ってもいい。

なにが「治安当局の取締り拠点」だ。

むしろ、寝ようと唄おうと一杯やろうと、ここばかりはウルサイこと言わない別天地という具合な一角が記念碑のまわりになるように、考えるのがホントじゃないのか。

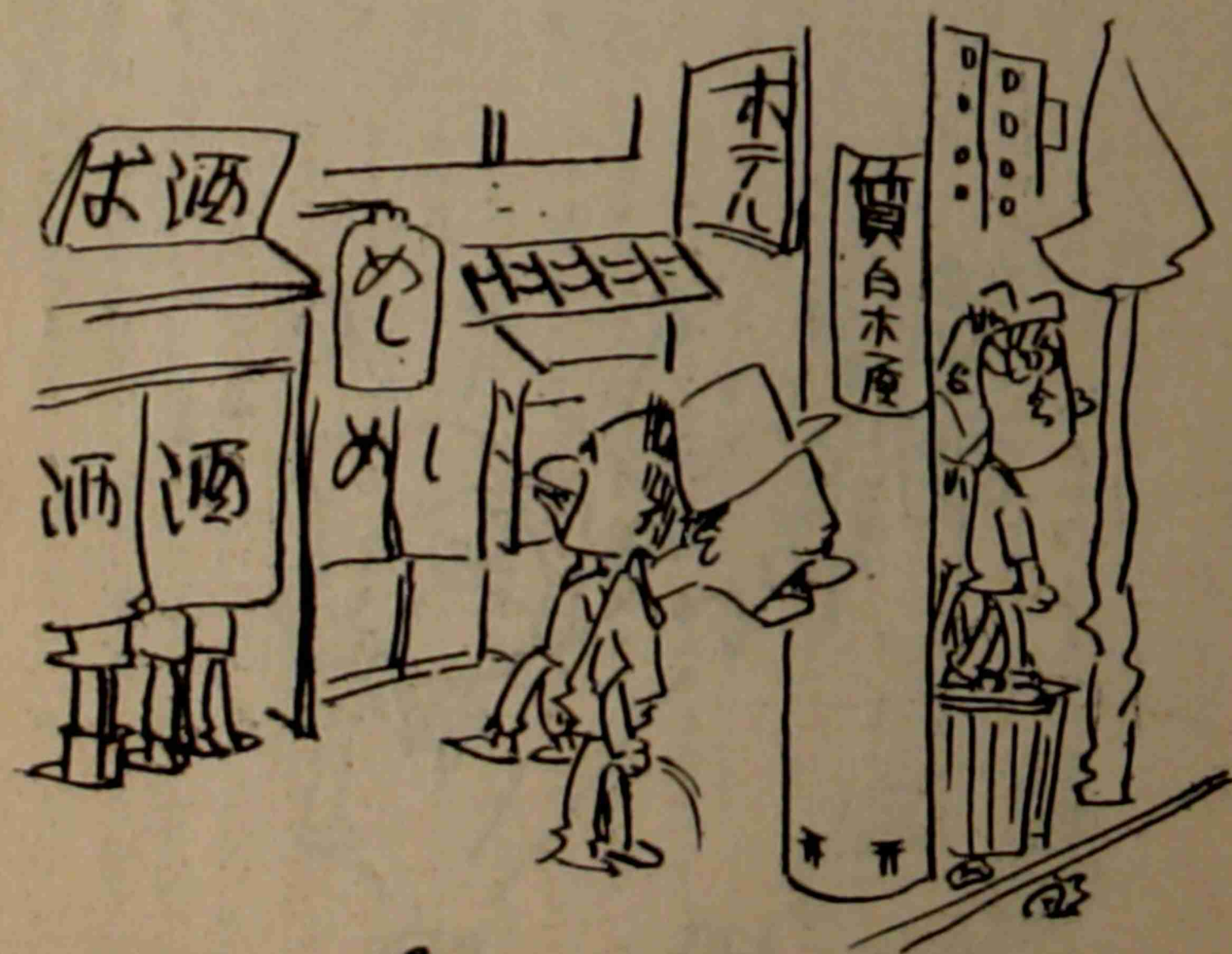
芸人とは本来そういう意味で自由人だったはずだ。

この話、やり出すと長くなるからやめておくれ。労働者、つまりは客であり、昔は同じ流れ者仲間だった者を下に見るカミサマにされちゃ芸人も終りだな。

ま、終りになったからといっては石のキネレヒやうたでようってわけだ。



MT
あいりん失業センター 52.6.21



MT